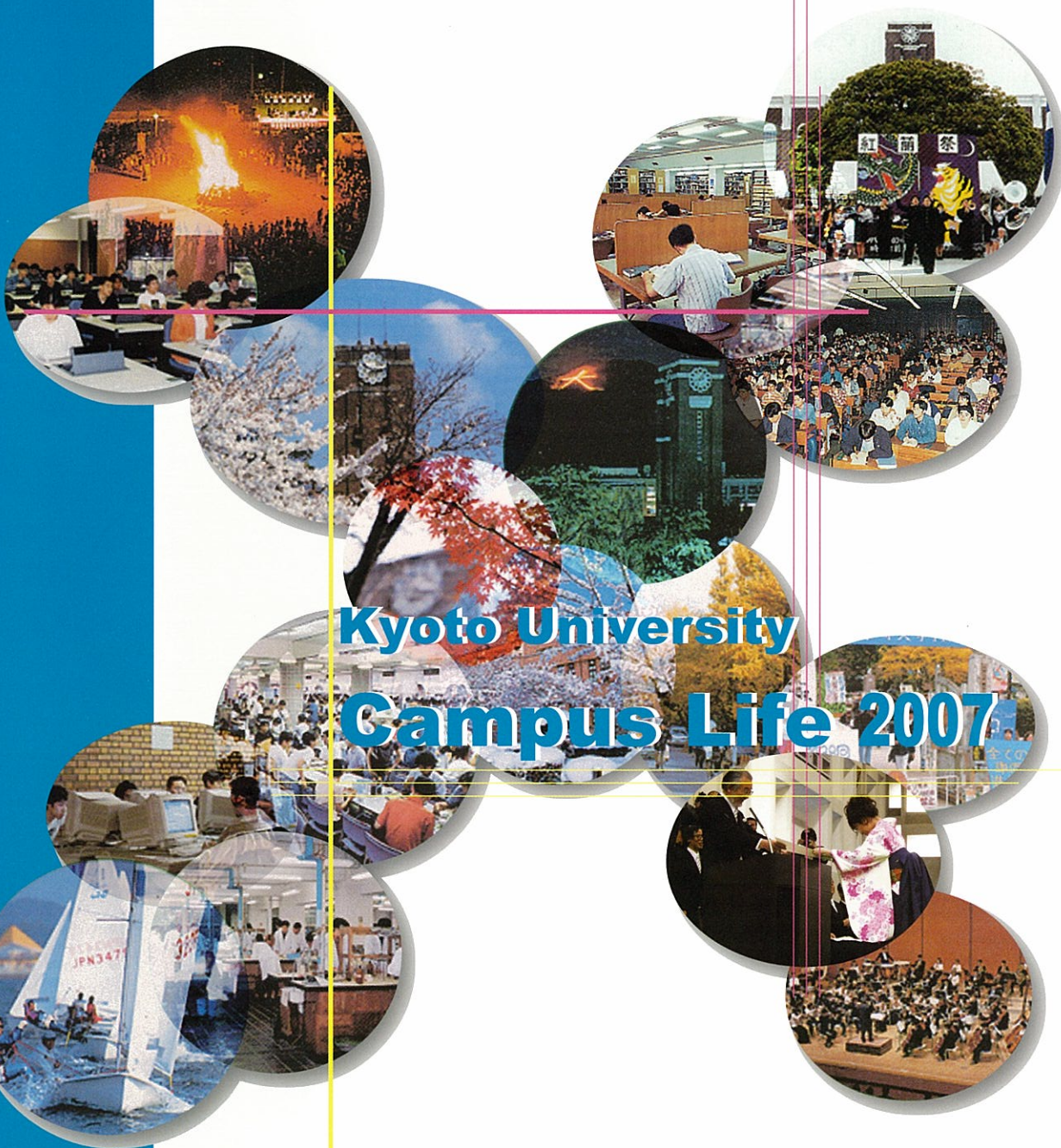


京都大学学生生活白書

平成 19 年度 《学生生活実態調査》 のまとめ—概要—



Kyoto University
Campus Life 2007

目次

A. 調査に協力してくれた人たち	1
B. 家庭状況	1
C. 住居と通学	3
D. 生活費の状況	4
E. アルバイト	5
F. 食 事	6
G. 耐久消費財	7
H. 学内施設の利用	8
I. 入学と学業	9
J. 課外活動(サークル・ボランティア活動)	11
K. 旅 行	12
L. 健康・悩み	13
M. 進路(進学・就職)	14
N. その他	15

※本書では調査結果を小数点第2位で四捨五入し、小数点第1位までの表記としています。したがってグラフの数字を合計しても100.0%にならない場合や合計欄の数字にならない場合があります。また、過去の白書から引用した数字は小数点第1位で四捨五入されているものもあります。

表紙カット=京都大学百年史編集委員会編『京都大学百年史-写真集』:京都大学後援会(1997)より

A. 調査に協力してくれた人たち

京都大学の学部と大学院に在籍する学生を対象に学生生活の実態を把握し、キャンパス全般の環境整備に役立てるため、昭和28年以降『学生生活実態調査』を実施しています。

すべての京大生のうち学部学生（以下学部生）・大学院学生（以下院生）からそれぞれ7人に1人の割合で、2,967人を無作為に抽出し、平成19年10月にアンケートを実施したところ、1,537人から回答が寄せられました。調査に協力してくれた学生諸君に感謝いたします。

学部・大学院	学部学生	修士課程	博士課程	専門職学位課程	合計
総合人間学部	63				63
文学部・文学研究科	78	24	17		119
教育学部・教育学研究科	14	5	5		24
法学部・法学研究科	49	2	3		54
経済学部・経済学研究科	50	4	3		57
理学部・理学研究科	67	84	62		213
医学部・医学研究科	55	8	51	8	122
薬学部・薬学研究科	46	24	14		84
工学部・工学研究科	277	147	33		457
農学部・農学研究科	45	73	34		152
人間・環境学研究科		13	1		14
エネルギー科学研究科		30	8		38
情報学研究科		27	9		36
アジア・アフリカ地域研究研究科		1	10		11
生命科学研究科		23	14		37
地球環境学堂・学舎		6	4		10
法科大学院				32	32
公共政策教育部				8	8
経営管理教育部				6	6
合計	744 (40.5%)	471 (76.2%)	268 (64.6%)	54 (54.5%)	1537 (51.8%)

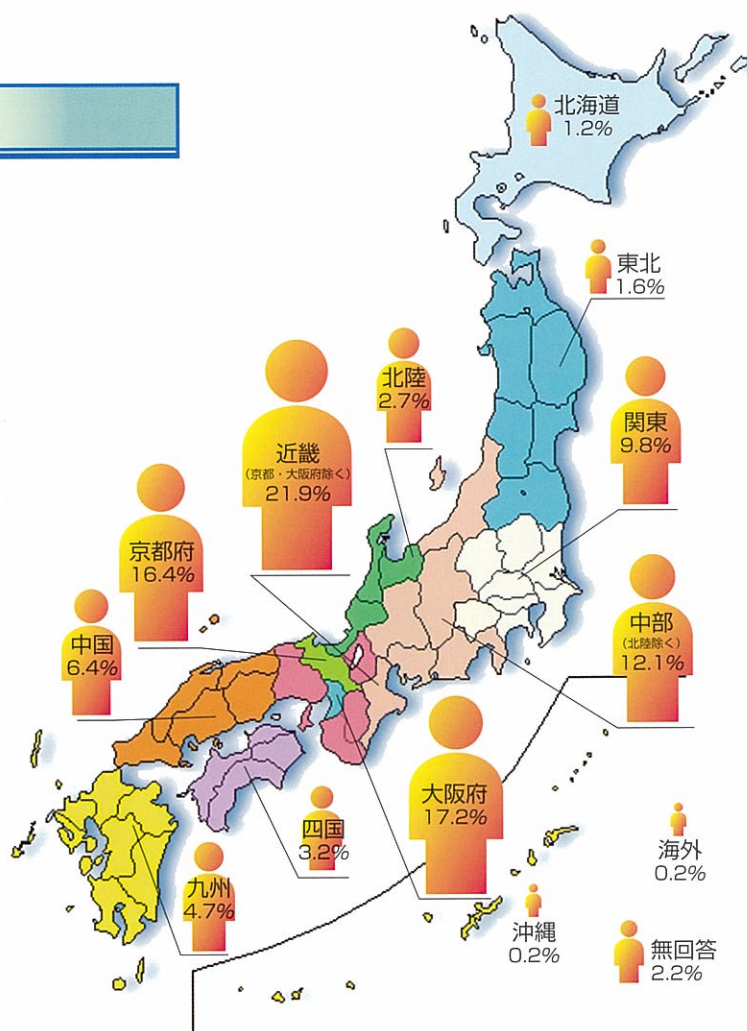
()内の数字は回収率を表す。アジア・アフリカ地域研究研究科の1・2回生は修士課程に算入

B. 家庭状況



近畿圏出身の学生が過半数

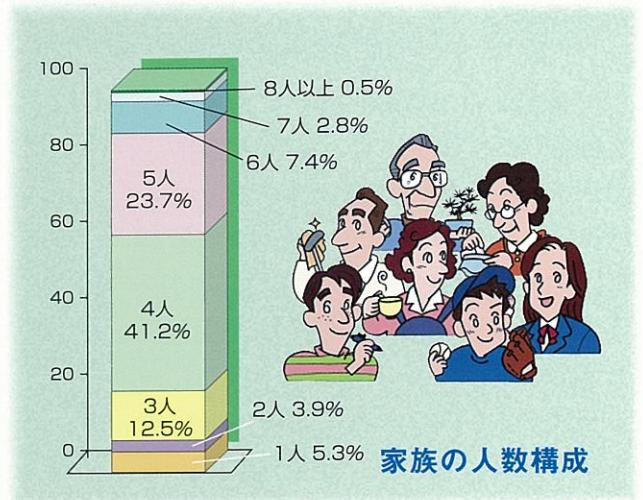
京大生の家庭所在地は、全体の55.5%が近畿圏で、大阪府17.2%、京都府16.4%となっている。京都・大阪府で3分の1という数字は前回と変化がないが、大阪府が若干減少し、京都府が若干増加している。学部生では、54.6%が近畿圏で、大阪府18.1%、京都府12.8%、修士課程学生（以下修士）では、54.4%が近畿圏で、大阪府19.7%、京都府11.9%となっているのに対して、博士課程学生（以下博士）では、61.3%が近畿圏で、大阪府10.1%、京都府34.0%と京都府に家庭があるという回答が最も多い。これは博士が結婚などの事情で京都府に家庭を構えたことが関係するものと考えられる。



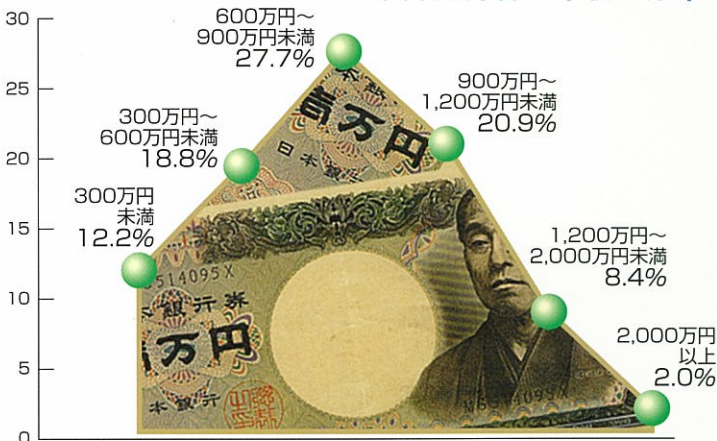
京大生の出身地分布

家族の人数（本人を含む）は、《4人》が41.2%と最も多く、ついで《5人》の23.7%、《3人》の12.5%の順である。前回は《4人》とする回答が45.6%、《5人》とする回答が26.9%であった。両親については、《父母とも健在》とする回答が88.1%で、前回の95%から大きく低下しているが、これは今回独立生計者、既婚者は回答不要にしたので博士の回答で《無回答》が2割に達していることが影響しているようである。

既婚者は、学部生では0.1%（実数1名）、修士では1.3%であるのに対して、博士では14.9%、専門職学位課程学生（以下専門職）では11.1%と高くなる。既婚者のほぼ半数に子どもがあり、そのほぼ半数は子ども



家計支持者の年収の分布



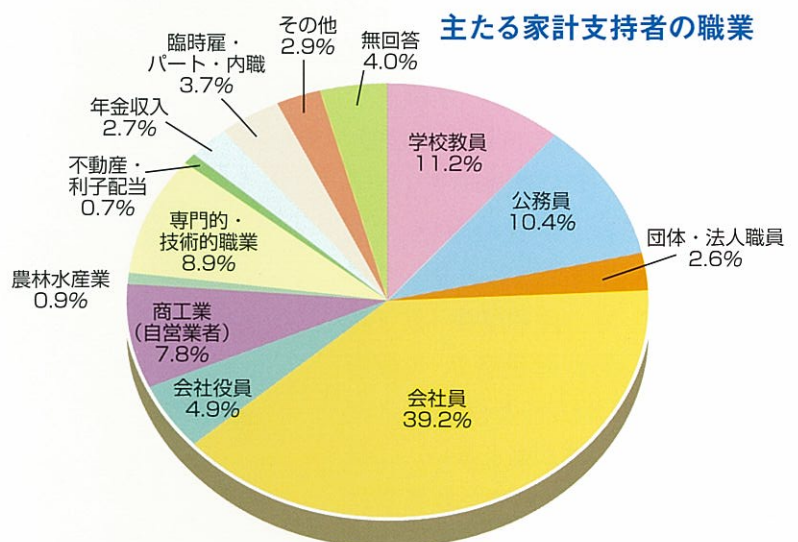
も1人である。こうした数字は、ほぼ前回、前々回と同様である。

《家計支持者》は、学部生では《父》が87.6%、《母》が8.1%、修士では《父》が81.1%、《母》が10.1%で、これらの数字は前回同様であるが、博士では《本人》とする者が29.9%、《配偶者》とするものをあわせると33.6%になり、前回の26%よりも大きく上昇している。また、専門職では《本人》とする者が13.0%、《配偶者》とする者7.4%と配偶者の割合が博士に比べて高いが、数が相対的に少ないこともあって何ともいえない。



《主な家計支持者》の年収、前回調査から変化なし

《主な家計支持者》の年収では、《600万円以上 900万円未満》が27.7%、《900万円以上 1,200万円未満》が20.9%、《300万円以上 600万円未満》が18.8%である。博士では、《300万円未満》が26.9%、《300万円以上 600万円未満》が21.6%となっており、全体に比べて年収が低い割合が高いが、これは自身を主たる家計支持者とする者が多いためと考えられる。家計支持者の職業は、全体では《会社員》が最も多く39.2%、《学校教員》《公務員》《専門的技術職業》が10%前後で続いており、前回・前々回と同様の分布を示している。博士と専門職については《会社員》の割合は相対的に低く《専門的技術職業》が相対的に高い。



C. 住居と通学

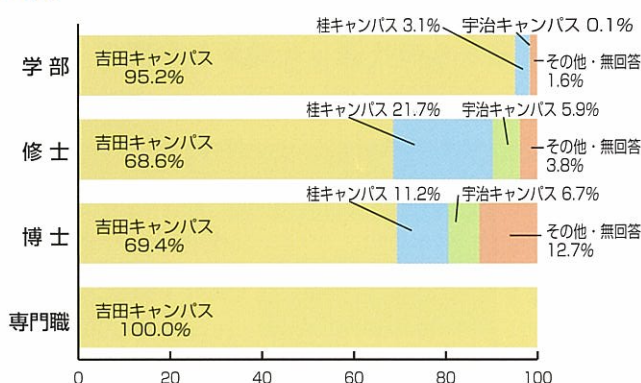


自宅外生が7割、その大半はアパート・マンション等に一人住まい

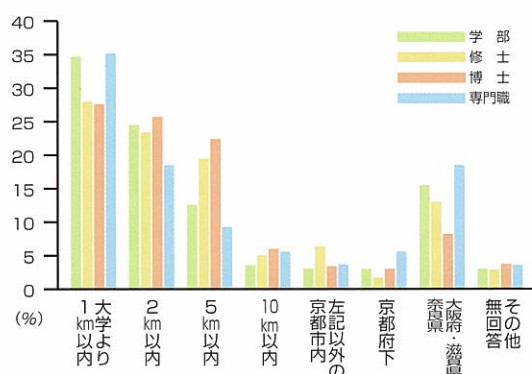
《自宅生》の割合は、前回より増加し、全体で30.5%であった。学部生・修士・博士のすべてで増加しているが、とくに博士は41.8%、専門職は40.7%であり、配偶者等を持つ学生が増えてきていることによると思われる。また、通学しているキャンパスは、82.7%が吉田、10.1%が桂、3.1%が宇治、その他が3.7%であった。キャンパスから《2 km以内》に居住する学生は、前回に引き続き減少し55.5%になり、《10 km以遠の京都市内》が4.2%に増加した。《大阪・滋賀・奈良県》の居住者も全体で13.5%に微増したが、修士・博士ではむしろ減少している一方で、専門職では18.5%と非常に多い。

自宅外通学者の住居の種別では、《アパート》《マンション》が合計で88.8%、《一人部屋》は91.2%で、前回と大きな変化は無い。部屋の広さは、大半の学生(81.4%)が《7.5㎡(4.5畳)から20㎡(12畳)未満》に、約半数(49.1%)の学生が《6畳以上9畳未満》に居住しているが、《3畳未満》の学生も全体で2.5%、博士でも3.0%いる。

通学キャンパス



キャンパスを中心とした通学距離

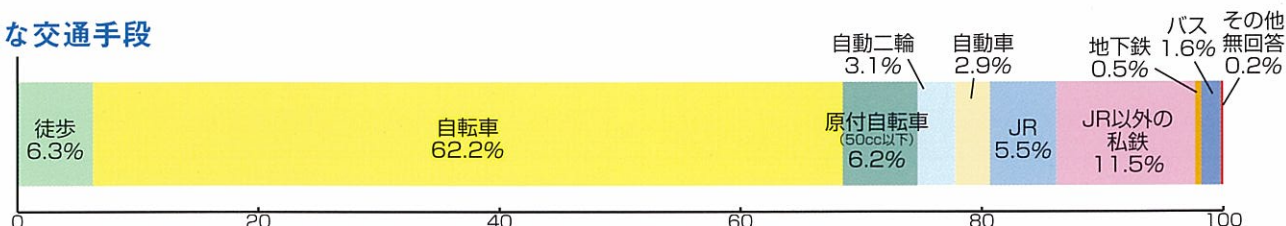


主な交通手段は自転車、公共交通機関の利用もやや増加

通学の主な交通手段は大半が《自転車》で62.2%であり、前回(65.6%)までの増加傾向は減少に転じた。《原付自転車》と《自動二輪》合計も9.3%と、前回(10.2%)より減少している。増加したのは、《JR》《私鉄》《地下鉄》《バス》合計19.1%(前回16.2%)と《徒歩のみ》6.3%(前回4.8%)であった。通学の片道所要時間は《15分未満》が56.5%と前回(62.7%)より大きく減少、《30分未満》に広げても74.5%と前回(77%)より減少している。大学の近辺に居住する学生たちだけでなく、独自の生活空間をもつ学生も出てきたようである。



主な交通手段



D. 生活費の状況



収入の部

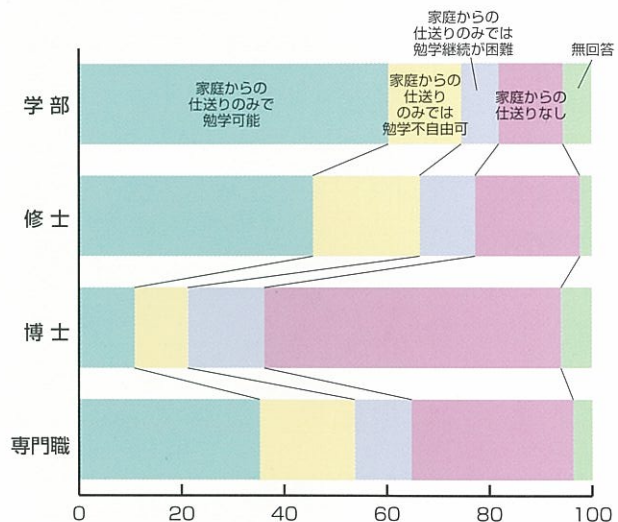
学部生の平均月収に《家庭から》が占める割合は61.3%、修士では45.0%、博士では11.4%、専門職では40.9%である。《奨学金・研究奨励金》が占める割合は、同じ順序でいうと、12.6%、33.7%、41.6%、32.0%、《アルバイト》については同じく、24.7%、16.4%、40.2%、14.7%である。博士以外は家庭への依存度が高いが、博士では《家庭からの仕送りなし》が57.8%（ちなみに学部生12.5%、修士20.4%、専門職31.5%）であり、自立性が高いことが注目される。Eの調査項目から定期・不定期にかかわらず毎月アルバイトをした学生の割合は学部生が博士を上回るのに対し、アルバイトに費やす時間が月平均30時間以上の学生の割合が博士で学部生のその約3割上回ることが明らかになっており、研究時間をアルバイトに割かざるを得ない経済的に厳しい博士の少ないことが窺える。



支出の部

生活基礎支出費（食費・部屋代・水道光熱費）は、学部生・修士・博士・専門職の間に大きな差は見られない。それが占める割合は四者全体の平均では、53.9%である。博士および専門職の《勉学費》が、金額ベースで1万円を超え、学部生・修士課程が5千円程度であるのに比べ倍以上高い点が注目される。専門職については、買わざるをえない教科書・参考書が多いと想像される。四者とも、支出のうち最も増やしたい項目として《勉学費》（17.1%）を挙げ、最も減らしたい項目として《食費》（20.9%）を挙げている。

家庭からの仕送りと勉学との関係 (%)



平均収支金額

1か月の平均収入金額

(単位: 千円)

区分	家庭から	奨学金・研究奨励金	アルバイト	借入金	その他	収入合計
学部	69.1	14.2	27.9	0.6	1.0	112.8
修士	58.7	43.9	21.3	0.3	4.9	129.0
博士	25.6	93.5	90.4	4.8	10.5	224.7
専門職	60.6	47.3	21.8	0.0	18.3	148.0

1か月の平均支出金額

(単位: 千円)

区分	食費	部屋代	水道光熱費	衣服費	勉学費	課題活動費	交通費	医療費	教養・娯楽費	嗜好品費	借入金返済	授業料等	その他	余剰金・預貯金	支出合計
学部	24.1	34.7	4.4	6.6	5.3	6.0	6.9	1.0	5.4	2.3	0.1	0.4	0.6	14.7	112.4
修士	28.9	39.1	4.7	5.9	5.6	4.3	8.9	1.2	6.5	3.0	0.4	2.5	2.1	14.1	127.3
博士	38.6	49.2	7.9	8.4	13.5	4.0	14.1	3.9	11.1	6.1	3.4	13.5	9.5	38.5	221.6
専門職	28.1	34.4	4.8	5.8	11.1	3.8	10.2	2.2	6.9	3.6	0.2	7.9	3.4	16.5	138.9

※授業料等は独立生計者のみ記入

E. アルバイト



定期的なアルバイトは減少

アルバイトを《不定期的に毎月した》者の割合は、全体で(31.5%)となり、《定期的に毎月した》者の割合(18.7%)より上回り、これは前回調査《定期的》(45.5%)、《不定期的》(8.4%)から逆転する結果となった。専門職は、《しなかった》(72.2%)が多かった。

職種については、学部生では、《販売・サービス》(28.4%)、《学習塾講師》(21.6%)、《家庭教師》(18.9%)の順となり、修士では、《教育研究補助》(24.7%)、《販売・サービス》(18.5%)、《家庭教師》(17.5%)の順、博士では、《教育研究補助》(43.6%)が主に占める結果となった。

月平均労働時間は、全体の過半数の者が(57.1%)、学業に大きな支障のない30時間未満であった。

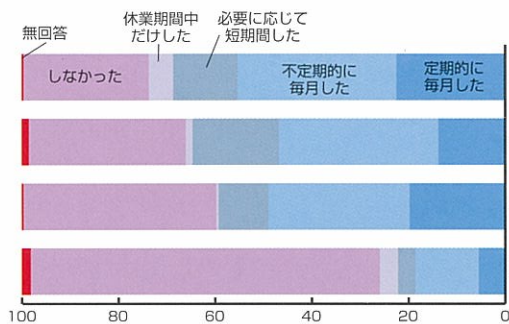
アルバイトの紹介先は、学部生では《紹介誌・新聞広告・チラシ》(31.4%)と《友人・知人・先輩》(30.7%)が主となり、修士では、《友人・知人・先輩》(35.4%)、《教官》(19.0%)、《紹介誌・新聞広告・チラシ》(15.4%)の順となった。一方、博士では、《教官》(46.3%)と《友人・知人・先輩》(29.4%)が主となり、教員が紹介する《教育研究補助》の割合の増加に対応していると考えられる。

アルバイト収入の用途について、学部生、院生ともに、《衣食住費》《教養娯楽費》への割合が多いのは変わらないが(約6割)、《勉学費》への割合は、学部生(7.0%) 修士(13.9%)、博士(28.4%)、と割合が増えていく傾向である。

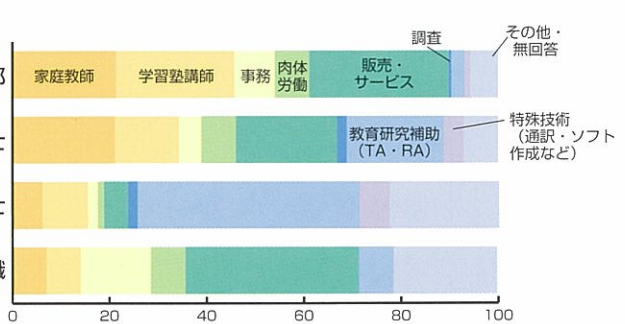
アルバイトと学業の関係について、《ほとんど支障はなかった》が学部生、修士、博士共通して6割を超え、全体で(65.1%)となった。

アルバイトをしなかった理由について、全体の半数が、《やりたかったが時間的余裕がなかった》(50.0%)としている。また、《経済的に不要》が全体で(24.4%)となった。アルバイト経験の感想について、全体の(66.9%)が《人生(社会)経験が得られて有意義であった》としている。

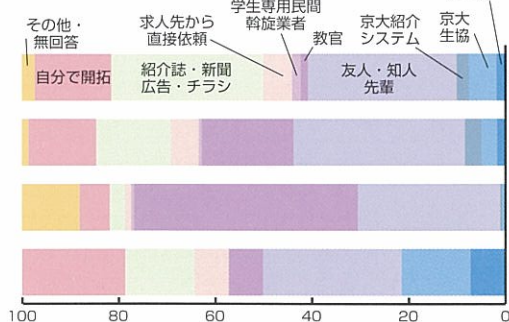
アルバイト状況 (%)



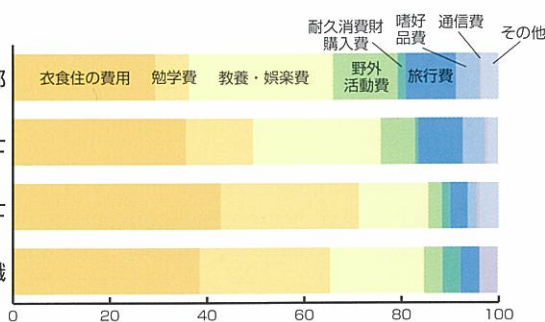
アルバイトの職種 (%)



アルバイト情報の入手先 (%)



アルバイト収入の用途・用途予定 (%)



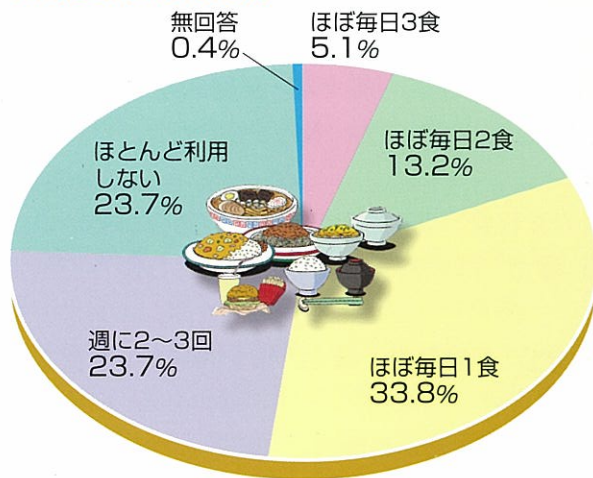
F. 食 事



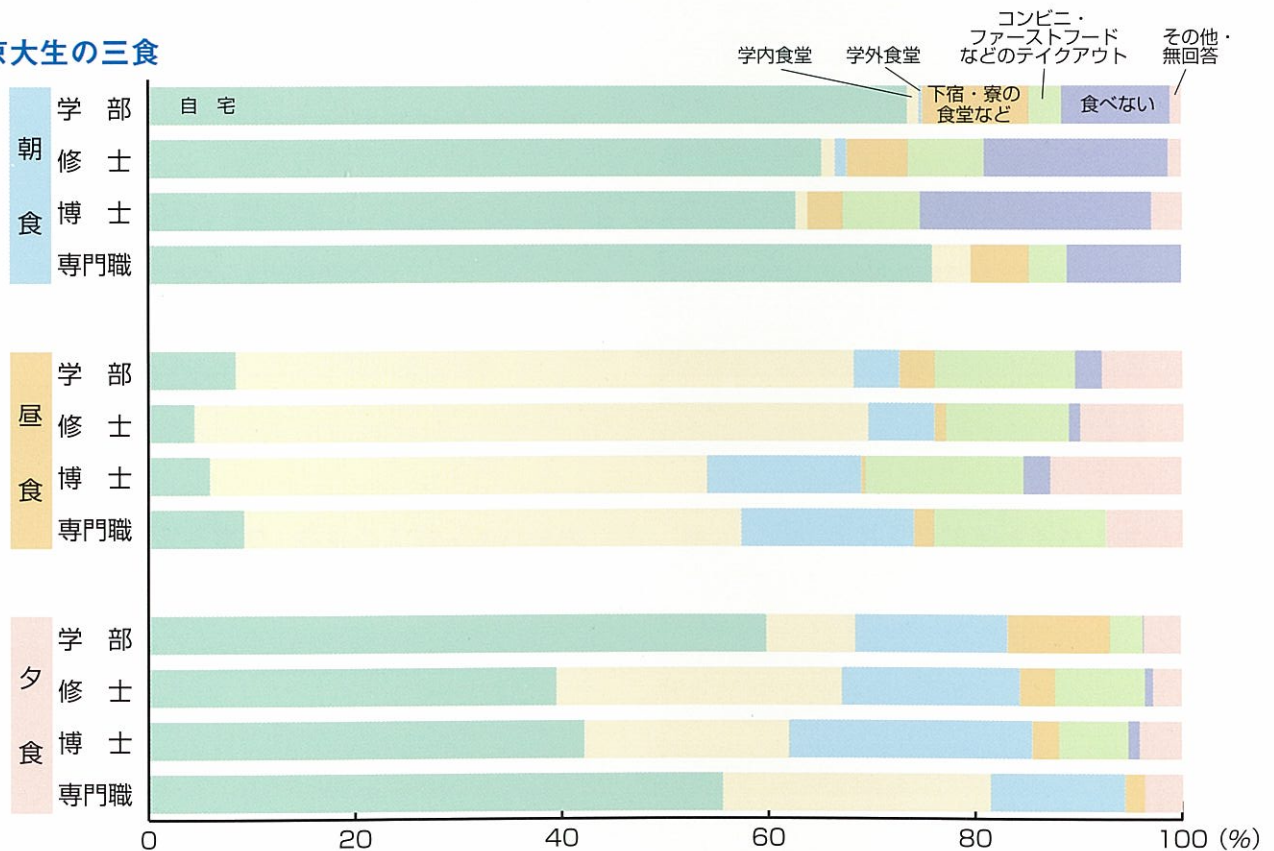
朝食抜きは 15%、昼食は学内食堂利用者が 59%

朝食をとらない学生は全体で 14.8% と前回調査より減少している。学部生 10.5%、修士 17.8%、博士 22.4% と、学部生の健康志向がうかがえる。夕食を、自宅・下宿・寮で摂取する割合は、学部生で約 70% に達するのに比べ、院生では半数に満たず、学内食堂で摂取する割合においてその逆の傾向を示している。一方、学内食堂を利用しない学生の割合は不変で、その理由としての第一位が《利用したい昼食時は何時も混んでいる》という回答で、次点で、売店のおにぎりなどで済ませているという回答であった。

学内食堂の利用状況



京大生の三食



G. 耐久消費財



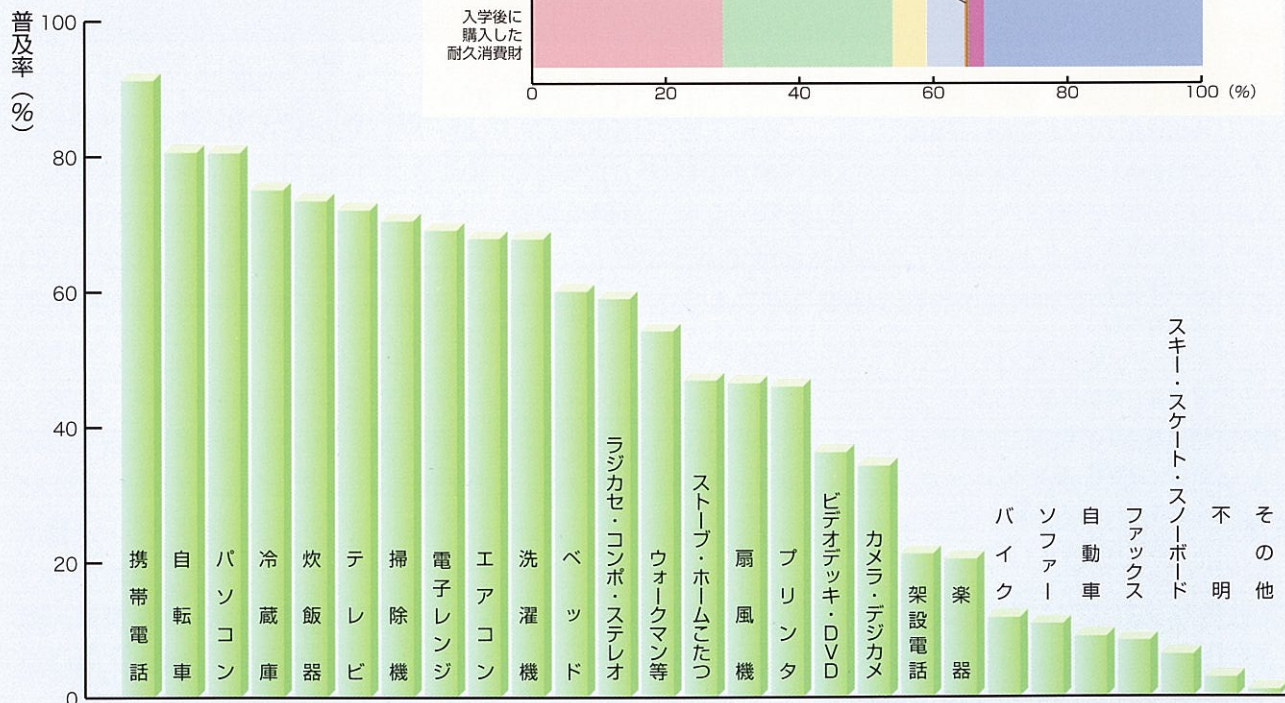
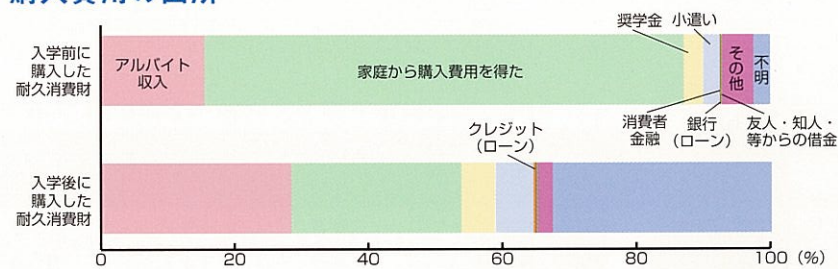
携帯電話は9割、パソコンは8割以上の学生が所有

所有率が最も高い耐久消費財は、前回の調査と同じく携帯電話であった。入学時において既に91.2%の学生が携帯電話を所有している。入学後の購入も13.3%ある（買い換え含む）ので、ほとんどの学生が携帯電話を持っていると言ってよいだろう。前回調査では博士の所有率は64%と低かったが、今回は92.5%に上昇している。専門職の値も同程度である。携帯電話の次に所有率が高いのは80.6%の自転車、次いでパソコン、冷蔵庫、炊飯器、テレビ、掃除機、電子レンジ、エアコン、洗濯機となる。

パソコンの所有率は2位の自転車と0.1%しか変わらない。入学後に購入した学生も20.2%いる。所有者の割合は、学部生より院生が高く、博士では89.6%に及んでいる。パソコン所有者の86.8%はインターネットに接続している。今やパソコンは学業や情報収集のための必需品となったことが分かる。

これらの耐久消費財の購入費用は、全体の7割の学生が親元に頼っている。ただし、この割合は学部生、修士、専門職、博士の順に減少し、博士では51.5%でしかない。その分、アルバイトの割合が増えている。しかし、金融機関や知人からの借入の割合は極めて少なく、これらを第一の出所源としている人はどれも0.1%程度である。この点での心配は少ないようである。

購入費用の出所



京大生が所有している耐久消費財と購入費の出所

H. 学内施設の利用



利用頻度の高い生協と図書施設

京大生がもっとも頻繁に活用する学内施設は生協食堂と購買部である。《ほとんど毎日利用する》と《週に2～3回程度利用する》を合わせると生協食堂・購買部とも7割を超えるが、博士は6割に達しない。吉田キャンパスのコンビニの利用は、学部生で《ほとんど毎日利用する》は約5%、《週に2～3回程度利用する》が約20%だが、院生の利用は両者合わせても5%以下で、《まったく利用しない》という回答も7割前後ある。レストランの利用も学部生・院生ともに著しく低い。とくに桂キャンパスのレストランについては、《まったく利用しない》という回答が9割を超え、通学キャンパスが桂である学生に限ってみても約半数が《まったく利用しない》としている。こうした傾向は前回と同じである。

附属図書館については、《ほとんど毎日利用する》と《週に2～3回程度利用する》を合わせたものは、全体では2割程度であるが、学部生では3割、専門職では4割を超える。他方、修士および博士では1割以下であり、《まったく利用しない》という回答もそれぞれ21.4%、32.8%であった。各学部の図書館利用については《ほとんど毎日利用する》と《週に2～3回程度利用する》を合わせたものは2割程度であるが、ここでも専門職では、4割を超える。

総合体育館、総合博物館などの施設については著しく利用者は少ないが、総合体育館についてはクラブ活動で占有されているが一般の学生も使用できるようにしてほしい、という要望も少なからずみられた。(自由記述編参照)

保健管理センター、保健診療所などの施設は、必要に応じて活用されており、《年に数回利用する》という回答が2割近くを占める。キャリアサポートセンターの利用は全体で前回の8.3%から13.5%に増加しているが、特に修士では23.6%が利用しており、他の課程の倍以上となっている。

(%)

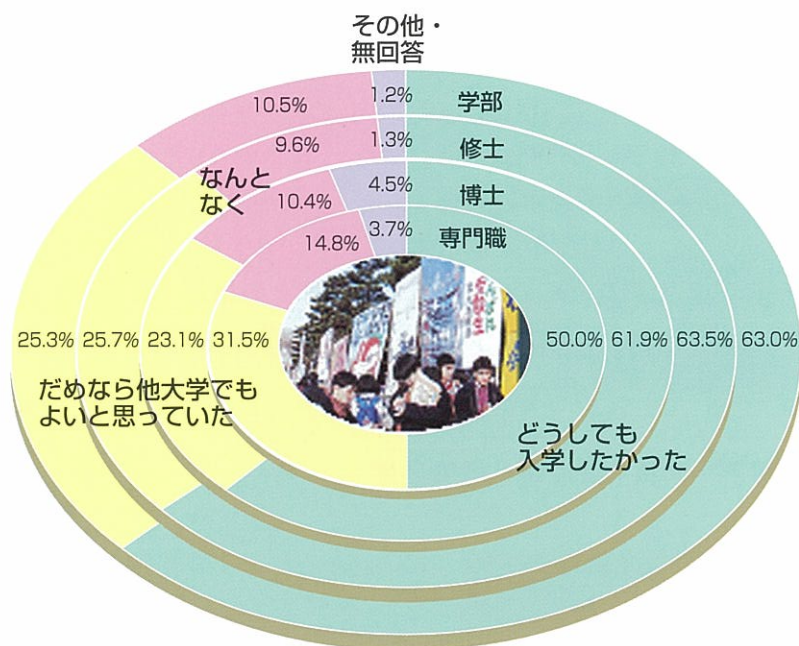
区 分	ほとんど毎日利用	週に2～3回程度利用	月に2～3回程度利用	年に数回程度利用	まったく利用しない
附属図書館	3.8	15.7	28.2	34.9	17.0
学部等の図書館・図書室・資料室	4.0	14.7	31.4	31.9	17.4
学術情報メディアセンター 南館	0.7	6.1	14.8	27.5	50.4
保健管理センター(吉田、桂キャンパス)	0.0	0.0	0.4	17.1	81.8
カウンセリングセンター	0.0	0.0	0.3	2.4	96.6
保健診療所	0.0	0.1	0.3	20.4	78.5
総合体育館	2.0	3.1	4.0	6.6	83.5
総合博物館	0.1	0.1	0.5	20.9	77.7
キャリアサポートセンター	0.0	0.7	2.2	10.6	85.9
学部等の就職情報等検索コーナー	0.0	0.5	1.3	7.8	89.7
学部等の談話室・国際交流室	0.4	1.6	1.9	4.5	91.0
スポーツ指導・相談室	0.0	0.0	0.0	0.7	98.6
クラブ・サークル部室	7.7	7.5	6.2	4.6	73.1
女性研究者支援センター	0.0	0.0	0.0	0.8	98.3
運動グラウンド	2.1	2.5	2.9	9.1	82.6
生協食堂(吉田、桂、宇治キャンパス)	44.3	25.7	14.1	8.0	7.5
生協購買部(吉田、桂、宇治キャンパス)	30.2	40.7	19.1	4.5	5.0
ナチュラル・ローソン(吉田南キャンパス)	2.2	11.1	16.9	20.6	48.6
レストラン(カンフォーラ、ラ・トゥール[吉田キャンパス])	0.1	0.9	10.4	40.6	47.4
レストラン(ハーフ・ムーンガーデン、ラ・コリーヌ[桂キャンパス])	0.8	1.4	1.4	4.3	91.2

※無回答を表から除外しています

I. 入学と学業



「どうしても入学したかった」京大生は6割超、但し専門職では半数



京都大学・大学院への入学希望度

《どうしても入学したかった》は全体で62.5%と、前回よりやや増加した。内訳は、学部生で63.0%、とくに修士では63.5%と大幅に増えているが、専門職では50.0%に留まっており、前回の調査では修士と専門職を分けて集計しなかったためと思われる。博士では61.9%と、前回(62.6%)以前からの減少傾向は続いているものの、《だめなら他大学でも良いと思っていた》割合は23.1%と前回より減少した。また、《他大学でも良い》は、全体でも25.2%と若干減少したが、専門職では31.5%と高い。

入学の動機は、学部18.3%と専門職22.2%で《社会的評価が高い》が一位の最多数となったのに対して、修士20.6%と博士27.2%では《スタッフ・設備が優れている》が選ばれた。《京大の伝統や雰囲気憧れていた》については、過去の3回の調査で、23%>19%>15%と減少傾向が見られ、今回でも全体で12.6%と下がったが、学部では16.8%に増加しており、低いのは修士の7.6%であった。修士では専門性が重視されたということでもあろう。

学部・学科等を選択する際に重視した二点については、全体で82.8%が《自分が惹きつけられた学問分野である》を選んでおり、ついで《最先端の学問が学べる》34.2%、《将来なりたい職業に就くのに必須の分野である》28.6%、《社会のために役立つ分野である》24.5%、《学部・学科・大学院専攻等の教員に魅力を感じる》13.4%と続く。この順位は、学部生・修士・博士でまったく同様であるが、専門職では、まず《将来なりたい職業に就くのに必須の分野である》63.6%、次に《自分が惹きつけられた学問分野である》52.3%が選ばれている。《最先端の学問が学べる》を第一に挙げた学部生は、前回まで増加してきており、13.1%であったが、今回は9.5%に減少した。

入学時に将来の進路を決めていた学生は、《ある程度決めていた》も含めると全体で67.9%であり、学部生62.9%<修士68.4%<専門職77.7%<博士78.7%の順番で高率になった。

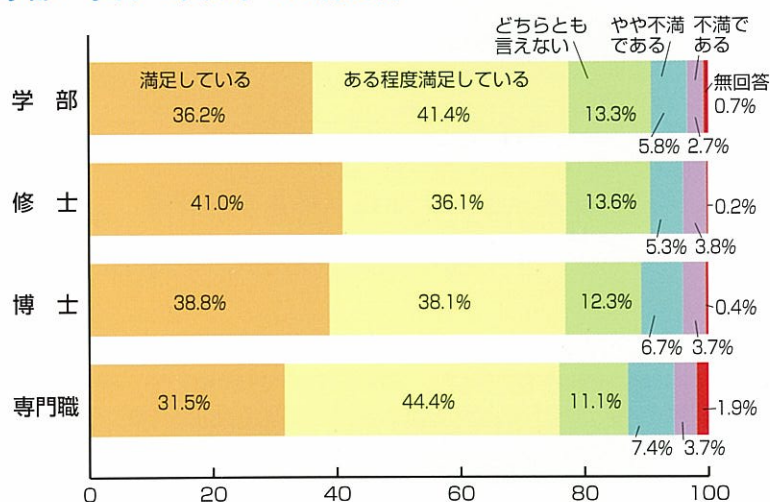


在籍している学部等への満足度は比較的高い、カリキュラムに満足 of 学部生は半数超

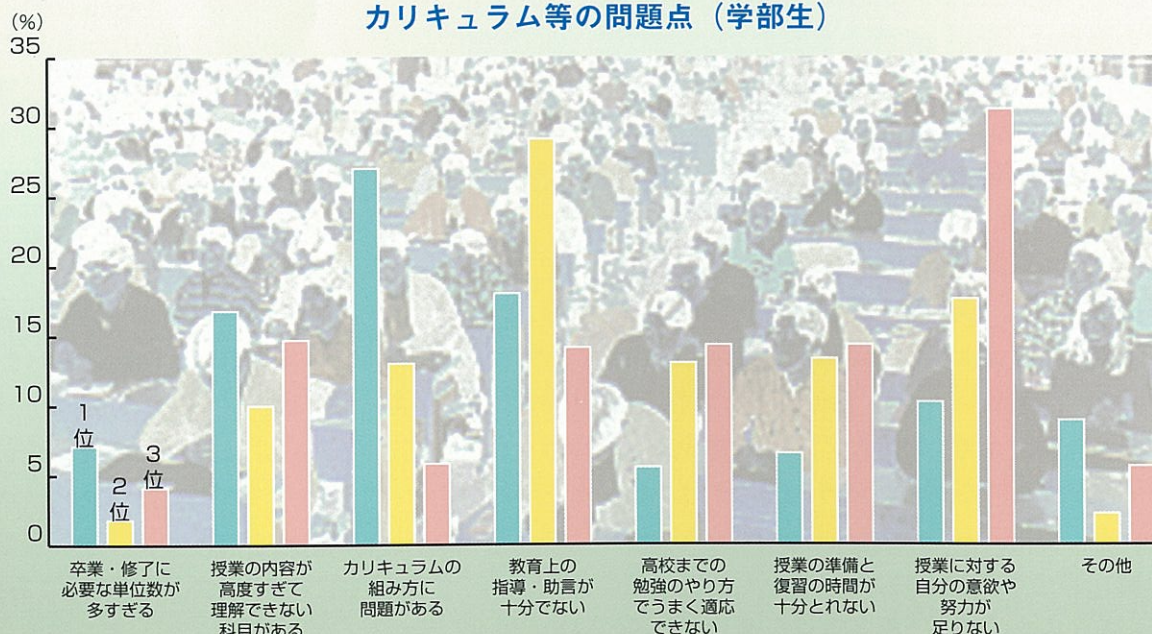
在籍している学部・学科・専攻等への満足度については、《満足・ある程度満足》が全体では77.2%を占め、前回(75.6%)より高くなり、学部生77.6%>修士77.1%>博士76.9%>専門職75.9%で大きな差は見られなかった。また、《不満・やや不満》も、全体で9.2%と前回(10%)より減少し、学部生8.5%<修士9.1%<博士10.4%<専門職11.1%であった。

学部生に対する「現行のカリキュラムに満足していますか」の問いでは、《満足・ある程度満足》が54.8%(前回46.9%)、《不満・やや不満》が20.8%(前回27.4%)、また、「現行のカリキュラムは消化できますか」の問いでは、《できる・ある程度できる》が79.1%(前回73.7%)、《困難・やや困難》が7.6%(前回11.3%)である。前回より満足度は増加してきているものの、さらなる改善が求められる。カリキュラム等の改善点についての問いで最も問題だと思ふことは《カリキュラムの組み方》であり、次に《教育上の指導・助言が十分でない》、3番目に《授業に対する自分の意欲や努力が足りない》が選ばれた。この順位は前回と同様であり、教員への要望とともに自己反省もなされている学生像を見ることができる。

学部・学科・専攻等への満足度



カリキュラム等の問題点 (学部生)



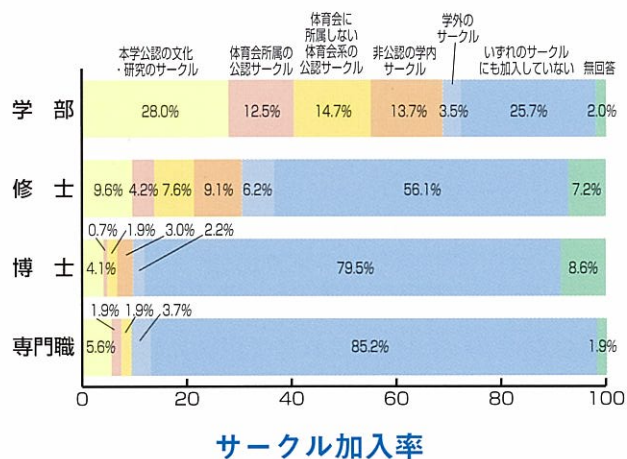
J. 課外活動（サークル・ボランティア活動）



学部生の7割超がサークル活動に参加

学部生の72.4%（前回68.9%）はサークルに加入しており、そのうち42.7%（前回45.5%）は1週間あたり5時間未満の活動に参加している。サークルの種別では、《スポーツ》が52.8%（前回59.1%）、《芸術・芸能》20.6%（前回17.9%）、《趣味》12.1%の順に多かった。前回第三位の《社会活動》は、今回は5.2%で第四位であった。

院生については、今回も前回とほぼ同様、サークル非加入の割合が高く、修士で56.1%、博士で79.5%、専門職で85.2%となっている。



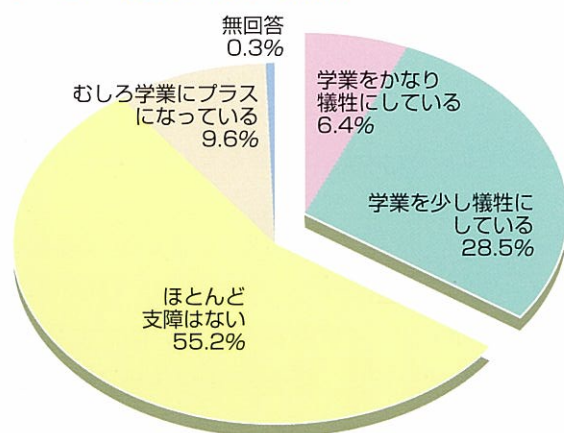
学業との両立をわきまえたサークル活動を

サークル活動と学業の関係では、《ほとんど支障はない》または《むしろ学業にプラスになっている》と回答した者の割合は合わせて、加入者全体の64.8%（前回63.0%）であり、《学業をかなり犠牲にしている》または《学業を少し犠牲にしている》と回答した者の割合はそれぞれ6.4%（前回7.7%）、28.5%（前回28.4%）であり、前回調査とほとんど変わっていない。

サークルに加入していない主な理由を2つ挙げてもらったところ、非加入者全体では、《時間的に拘束されたくない》あるいは《時間がない》を挙げた者が



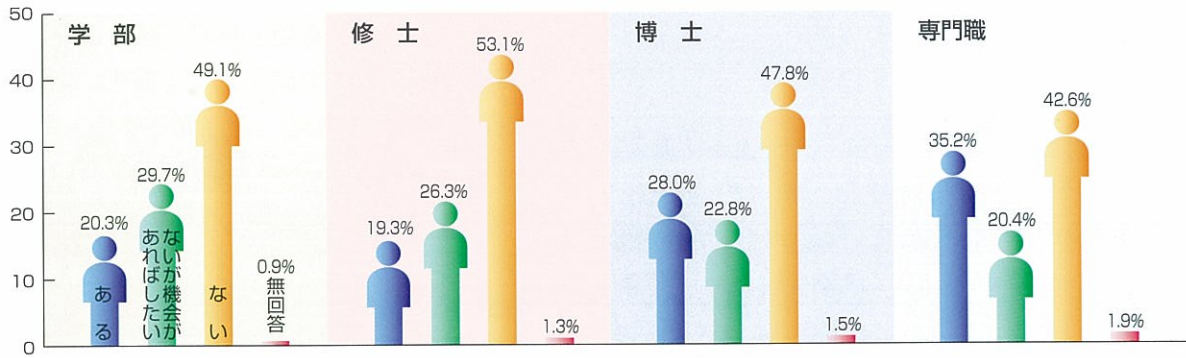
サークル活動と学業の関係



40.9%（前回40.5%）であった。なお、学部生と院生の間には回答の傾向に差異があり、たとえば《学業の妨げになる》を挙げた割合は、学部生では9.4%であるのに対して、修士では17.2%、博士では13.7%、専門職では20.6%であった。同様に、《時間がない》を上げた割合は、学部生で16.5%、修士31.1%、博士38.9%、専門職35.3%であった。《時間がない》の前回調査の大学院生全体の平均28.8%に比べて若干増加している。博士および専門職は勉学・研究に忙しいという印象である。



2割を超える学生がボランティア活動を経験

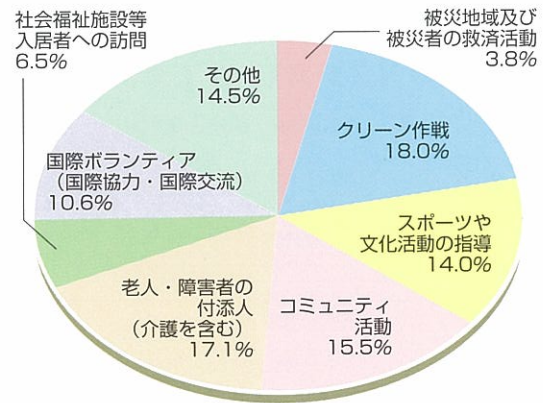


京大生のボランティア経験

調査学生の21.9%がこれまでボランティア活動を経験しているが、前回26.3%、前々回約30%というデータと比べるとやや減ってきている。年齢が高いとか社会人経験がある者が含まれるといった事情はあるだろうが、専門職が経験者35.2%と高い点が注目される。

活動の内容としては、《クリーン作戦》が18.0%、《老人・障害者の付添人（介護を含む）》等が17.1%、《コミュニティ活動》が15.5%、《スポーツや文化活動の指導》14.0%などであり、《スポーツや文化活動の指導》が前回9.6%から増えた点を除き、傾向はあまり変わらない。

ボランティア活動に従事した回数については、《年に数回》が68.5%（前回74.9%）で大半を占めたが、《月に1～2回程度》従事した者も13.7%（前回11.4%）いた。ボランティア体験の感想としては、58.9%が《人生（社会）経験が得られ有意義であった》と感じており、《あまり意味がなかった》と答えた経験者の割合は9.8%で少数であった。



ボランティア活動の内容

K. 旅行

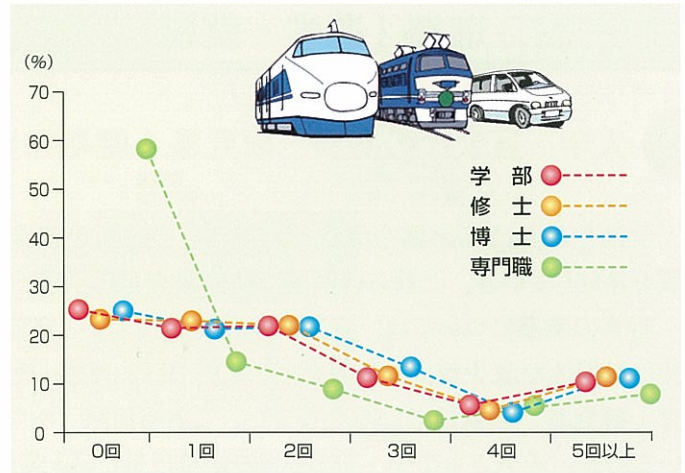


大学院生の外国旅行の目的は研究活動が主流

国内旅行について、全体で7割以上の者は、《1泊以上の国内旅行をしている》と回答している。《しなかった》と回答した学部生、院生は約25%、専門職は約60%。

外国旅行の目的の問いに、学部生では、《観光》（78.6%）を第一目的として、圧倒的に多く、次いで《課外活動》（6.7%）《語学研修》（4.5%）となっているのに対して、修士では、《観光》（61.7%）、《学会参加》（16.7%）、《学術調査》（9.4%）の順に、博士では、《学会参加》（37.8%）、《観光》（34.0%）、《学術調査》（16.0%）の順になっている。これは、前回調査よりも割合が減っているとはいえ、院生の外国旅行は、学会参加や学術調査などの研究活動を目的とするケースが主であることが窺える。

外国旅行した地域で最も滞在期間が長かったのは、全体として《アジア》(35.1%)、《ヨーロッパ》(31.1%)、《北米》(15.1%)の順で、これは、前回調査と順位、割合ともにほぼ変わらない結果となった。ただし、博士は、《ヨーロッパ》(33.3%)、《アジア》(32.1%)と《ヨーロッパ》が《アジア》をわずかに上回り、順位が逆転した。



平成 19 年 4 月～ 10 月までの旅行回数

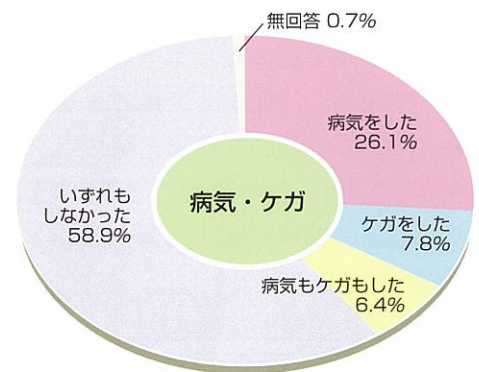
L. 健康・悩み



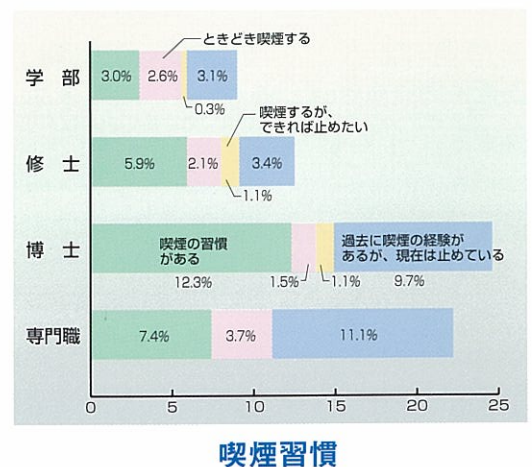
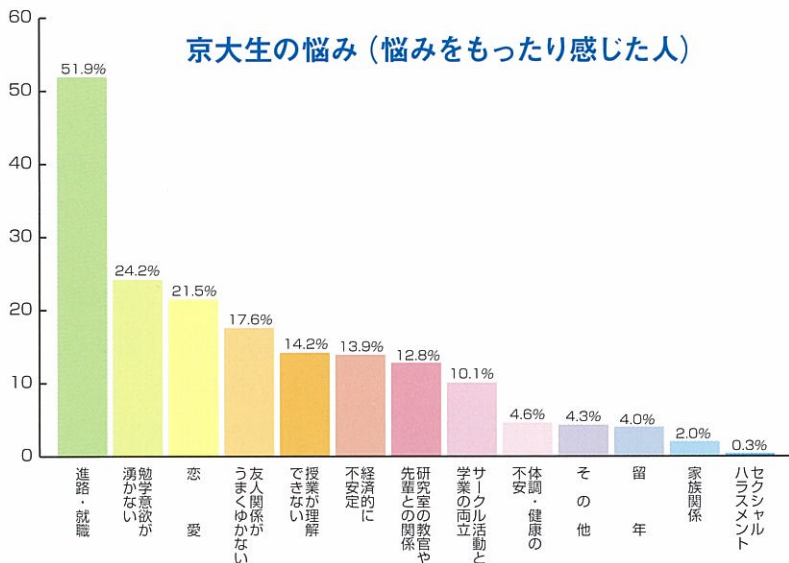
京大生の非喫煙者の割合は 86.3% で健康志向が高い
悩み事の相談相手は友人・先輩

喫煙率は、修士 9.1%、博士 14.9% と前回調査より修士で大幅に低下した。大学構内全面禁煙(附属病院構内では平成 18 年度より実施)に賛成する学生は、全体で 36.3% と前回とほぼ同じ割合であり、学部生では 41.7% であった。健康志向が学生に定着してきていると考えられる。

悩み事では《進路・就職》が最も多く、次いで《勉強意欲が湧かない》《恋愛》《授業が理解できない》の順であり、前回と比べて学生の悩み事が変化しつつある。これは選択肢を増やしたこと等によるものと思われる。相談相手も《大学内の友人・先輩》が殆どで、教官やカウンセリングセンターは前回同様に少ない。また《誰もいない》という回答が全体で約 10% あるのが気になる。



平成 19 年 4 月～ 10 月の間に病気や怪我をした人



M. 進路（進学・就職）



大学・官公庁の教育・研究職へ就職希望が減り続けている

学部生の64.2%が修士課程への進学、28.5%が就職を、修士では、23.4%が博士課程への進学、72.6%が就職を希望している。これらの数値は前回調査とほとんど変わらない。

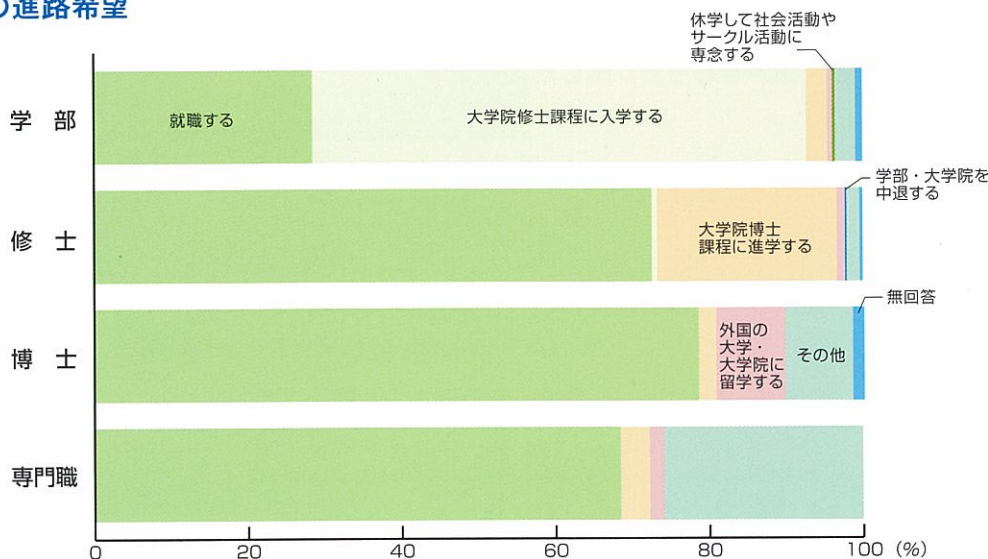
将来の職業については、京大生全体では《大学・官公庁の教育・研究職》が24.7%で最も多い。しかし、この値は長期的な減少傾向にある（前々々回（H13）35%、前々回（H15）30%、前回（H17）27%）。博士に限れば、《教育・研究職》の値は54.5%となるが、これも前回（61%）よりは減少している。教育・研究職の魅力が低下しているのか、それともこういった職への就職は難しいと考えているのだろうか。希望職種の第二位は《企業等の研究職》であり、次いで技術職、専門職、総合職の順となっている。課程の別で見れば、最も希望の多い職種は、学部生は《企業等の研究職》で22.8%、修士は《技術職》で32.3%、博士は上述の通り《大学・官公庁の教育・研究職》で54.5%、専門職は《専門職》で64.8%である。

職業選択の理由として上位を占めるのは、理由の三番目までの総計で、《自分の特技・能力や専門知識が活かせる》（68.6%）、《人を助けたり社会に奉仕する》（36.6%）、《安定した生活が保障される》（33.6%）、《独創性や創造性を発揮できる》（31.1%）、《十分な収入が期待できる》（29.6%）であり、前回・前々回とほぼ同じ傾向である。第一番目に何を選ぶかに限ると《専門知識が活かせる》は前々々回51%、前々回47%、前回41%、今回37.6%で、前回調査での指摘と同じく長期的な減少傾向にある。一方、《社会に奉仕する》は前々々回から今回まで14%、16%、21%、21.8%となっていて、増加を続けている。これも前回調査で指摘された通りである。

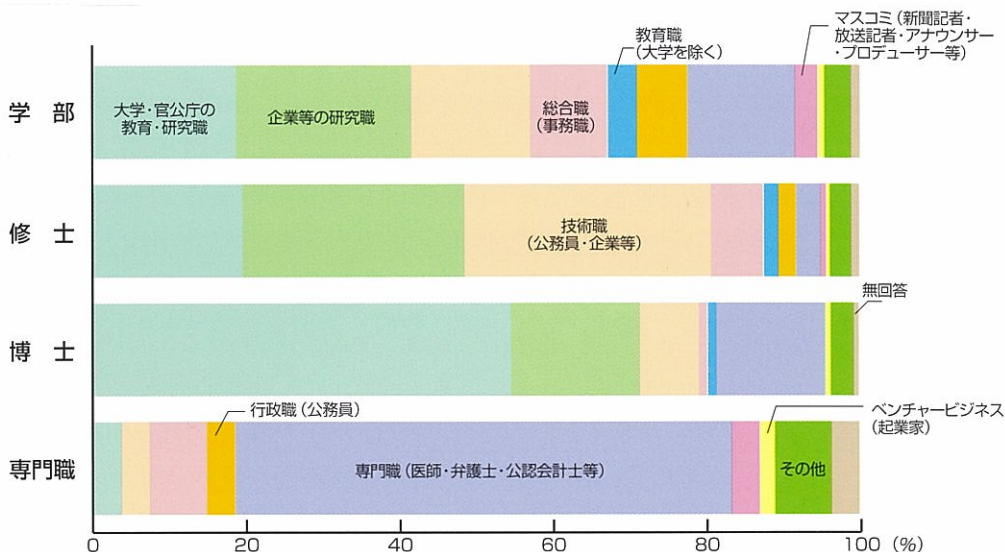
仕事や職場を選ぶ際に第一番目に重視する項目は京大生全体としては、《やりがいがある》（37.5%）、《給料がよい》（19.6%）、《能力を發揮できる》（9.6%）、《休暇を取りやすい》（6.6%）、《職場の人間関係が良い》（6.3%）であった。この順序は前回と同じで、値もほとんど変わらない。専門職では、《やりがいがある》をあげた人が51.9%にのぼり、他の課程の学生よりもこの値が10%以上高かった。

就職地域の希望では、《京阪神地区》（37.4%）、《地域を問わない》（32.7%）、《首都圏》（16.8%）の順であって、この傾向は前回と同じである。ただし、博士に限れば《地域を問わない》が45.1%で第一位となっている。研究職への就職の困難が反映されているのかもしれない。

京大生の進路希望



将来希望する職種



N. その他



学生から大学に多種多様な要望

本学学生の自転車運転マナーについて近隣住民の方などから多数の苦情が寄せられていることもあり、学生自身どう思っているか今回尋ねたところ、全体では、《良い》と《普通》を合わせた回答は50.9パーセント、《悪い》が31.0パーセント、《非常に悪い》が15.1パーセントであった。学部生、修士、博士、専門職の順で《非常に悪い》という回答の割合が高くなり、専門職では2割を超え、《悪い》《非常に悪い》を合わせると64.8パーセントになる。

国立博物館・美術館や茶道資料館の利用に特典があることについては、全体で約3割が知っており、そのうち3分の2が実際利用していると回答した。

学内における宗教活動について、全体では2割が勧誘されたことがあり、友人が勧誘されたという回答も15.2%あった。勧誘される機会が少ないと思われる博士・専門職では《自分が勧誘を受けた》という回答は約12%、《友人が勧誘を受けた》という回答も10%前後である。

大学に特に要望や期待することについて順不同で5つまで尋ねたところ、全体で最も多かったのが《授業方法の改善》(39.0%)で、順に《自転車置き場の改善・充実》(31.4%)、《自由に使用できるスペースの拡充》(29.7%)、《奨学金や育英貸付金の拡充・充実》(29.2%)と続く。

課程別にみると学部生・専門職で《カリキュラムの改革》・《授業方法の工夫・改善》が高くなっているが、学部生では高校までの授業との違いへの戸惑いとともに関心科目でも教員によって内容が異なる点、全学共通科目と専門科目のバランスが悪い点を指摘する向きが多く、専門職では法科大学院や社会人学生が多数を占めるためと思われる。他方修士・博士では《奨学金や育英貸付金の拡充・充実》が高く、「D 生活費の状況」

でも述べたように研究を続けるために経済的支援を必要としている院生が少なくないことを示している。

《自転車置き場の改善・充実》の要望は課程別で大きな差はないが、本学学生の自転車のマナーについて《悪い》と回答した学生で37.1%、《非常に悪い》と回答した学生で38.8%となっており、自転車のマナーについて意識する学生ほど設備面からも改善する必要があると感じていると言える。

大学への要望・期待すること

(%)

	学 部	修 士	博 士	専 門 職
カリキュラムの改革	32.3	20.0	11.9	38.9
授業方法の工夫・改善	47.3	34.4	22.0	50.0
授業関連施設（教室等）の充実	19.4	17.6	14.6	20.4
課外活動施設の充実	16.1	15.9	4.9	5.6
奨学金や育英貸付金の拡充・充実	18.8	35.0	49.6	20.4
カウンセリングや相談体制の充実	3.5	4.2	7.1	5.6
図書館の充実	19.0	21.4	29.1	31.5
就職対策の充実	20.6	24.0	19.8	22.2
トイレの改善・充実	11.0	13.6	12.3	11.1
学生への連絡方法の改善	25.4	15.5	11.6	16.7
自転車置き場の改善・充実	34.1	29.7	28.7	22.2
体育施設の開放	12.2	18.0	6.7	7.4
自由に使える LAN 環境	16.4	18.3	24.3	20.4
学生自治の尊重	7.0	5.3	6.3	3.7
自由に使用できるスペースの拡充	35.2	24.4	26.9	16.7
各施設の使用時間の延長	31.9	25.7	23.5	35.2
教職員の学生への対応態度	16.4	18.0	20.5	24.1
そ の 他	6.2	9.6	12.3	18.5

前回の学生生活実態調査との主な変更点

- 集計区分(学生身分)の1つに専門職学位課程を独立させた。(従来、専門職学位課程は修士課程に算入していた。)
1. Aの所属先に大学院公共政策連携教育部と大学院経営管理教育部を追加した。
 2. Bの両親については、「独立生計者・既婚者以外の人」への質問とした。
 3. Cの通学キャンパスの選択肢に「その他」を追加した。
 4. Dで支出項目に「授業料等の大学納付金」を追加し独立生計者にのみ記入とした。
 5. Fで食事場所の選択肢から「自炊」を削除し、「その他」を追加した。
 6. Gの耐久消費財で従来は、入学時に所有・専有していたものと、入学後に購入したものという質問を、現在の課程への入学時と入学後と注釈を入れ明確にした。
 7. Hで「女性研究者支援センター」を追加し、「学外課外活動(白馬山の家・白浜海の家)」を削除した。
 8. Jで現在の加入サークルの選択肢に「学外のサークル」を追加し、ボランティア情報の入手経路を質問項目に追加した。
 9. Kの外国旅行については「本学入学後の外国旅行」とした。
 10. Lの病気・ケガの治療日数の選択肢で「3ヶ月」を「3ヶ月以上」とし、傷病の原因を1つから2つに変更した。
 11. Lの悩みの種類の選択肢に「進路・就職」、「経済的に不安定」、「家族関係」、「体調・健康の不安」及び、相談相手の選択肢に「誰もいない」を追加した。
 12. Nの「その他」を調査項目に追加した。

学生生活実態調査の利用について

学生生活実態調査の利用については、直ぐに調査結果を反映できる事項とできない事項がありますが、長期的には大学としての施策立案に本調査結果を参考にしています。

- 例1. 図書館の現行の利用時間は、本調査において利用時間の延長を希望する声が多いものを反映した結果です。
- 例2. トイレの改修についても、改修希望の声が多いことを反映して順次改修しています。
- 例3. その他アクションプラン等においても学生生活全般の環境整備が調査結果を踏まえて実施・検討されています。(課外活動施設新営、桂の厚生施設等)
- 例4. 授業料免除で貸与奨学金や家計支持者死亡の保険金を所得に算入しない等の制度改善や民間奨学金のHP掲載等による情報提供の推進に努めています。



京都大学学生生活白書

平成 19 年度《学生生活実態調査》のまとめ—概要—

平成 20 年 3 月 発行

編 集 平成 19 年度学生生活実態調査委員会

委員長 小島 専孝 (経済学研究科教授)

委員 伊藤 良子 (教育学研究科教授)

亀本 洋 (法学研究科教授)

宗像 豊哲 (情報学研究科教授)

渡邊 大 (生命科学研究科教授)

杉山 雅人 (地球環境学堂教授)

発 行 京都大学学生部

〒 606-8501 京都市左京区吉田本町